

真理はたぶんひとつの権力形式である

川崎医科大学 哲学教室

木戸三良

(昭和63年10月13日受理)

La verité est peut-être une forme de la puissance

Saburo KIDO

Department of Philosophy, Kawasaki Medical School

Kurashiki, 701-01, Japan

(Received on Oct. 13, 1988)

概 要

「認識にはもともと偉大さも、権力もなく、崇めたてまつることも、征服することも、価値もないのである。発明や直感や発見は軽快なもので、力もいらす、金もなく、香をくゆらせることもなくおこなわれる。おそらく根拠もいらない。アレクサンドロスがいなければ学問は日光浴と同じである。」¹⁾ いわば真理は日光浴をしていたのだった。しかし今日では真理は権力のひとつの形式に姿を変えてしまっている。認識→真理→価値→権力、これが真理の近代における布置情況なのである。

本論のテーマは、認識そのものを解放するために、こういった近代の認識や真理の構造を批判することにある。なぜならば、認識論としての哲学はとりわけ科学についての、あるいはむしろ科学一般の科学性について反省を加えることなのであるから。²⁾

「アレクサンドロス大王は長々と自分の影を犬のディオゲネスの上に投げかけている。これ見よがしにくりひろげられた大きさの序列全体が認識を影の中に沈めてしまっている。学者はその学問から、地位、賞金、名声という社会的報酬しかもはや受けとらなくなった。知の草創の頃には、賞金も物神も、商品もまったくなかったが、今では知の対象はそうしたもので満ちており、知は日常の世界、アレクサンドロスの世界にすぎなくなった。知はそのために働くものをより良くすることもないし、主体の向上がもはや新しい対象を発見させることはもはやない。いや、学者が見ているのは自分の力、したがってその影が大きくなることである。学者の目にあるのは自分の背丈や栄光が、つまり自分の影が大きくなることなのだ。学者の見ているものは自分の予算や勢力や権力が増大することである。ヒロシマの長い影が世界に広がっていく。今や学者は取るにたらぬ連中のような愚かもの、高慢ちき、気取り、ペテン師、競争心だけは旺盛で退屈な人間であり、栄光を追う俗っぽい王様のようなものになり下がってしまった。アレクサンドロスの大きな影がふたたび学問を蔽ってしまう。」³⁾

Résumé

La connaissance est sans grandeur, sans puissance, sans adoration, sans conquête, sans valeur, d'abord.

L'invention, l'intuition, la découverte, légères, ont lieu sans force, sans or, sans encens. Peut-être sans lieu. Sans Alexandre, la science est un bain de soleil: c'est-à-dire, proprement la vérité est été un bain de soleil.¹⁾ Mais aujourd'hui la vérité devient une formalité de la puissance. La connaissance→la vérité→la valeur→la puissance, c'est une constellation moderne de la vérité.

C'est mon Thème que de critiquer la constellation moderne de la pareille connaissance et vérité afin de délivrer la connaissance telle qu'elle est été; avant tout, car une réflexion sur la science, ou plutôt sur la scientificité de la science, se nomme une philosophie comme une épistémologie.²⁾

Alexandre le Grand laisse traîner son ombre longue sur Diogène le chien, tout l'échelle de grandeur fastueusement déployée plonge la connaissance dans l'ombre..... Les savants ne reçoivent plus de leur science que des récompenses sociales, des postes, des prix, de la renommée. A l'état naissant, leur savoir était vide d'enjeux, de fétiches, de marchandises, maintenant les objets du savoir en sont encombrés, le savoir n'est qu'un monde usuel, celui d'Alexandre. Le savoir ne rend plus le travailler meilleur, et l'amélioration du sujet ne dévoile plus de nouveaux objets, non, les savants voient grandir leur pouvoir, donc leur ombre. Ils voient grandir leur taille et leur gloire, donc leur ombre. Ils voient grandir leurs trésors, leur importance, leur puissance, l'ombre longue d'Hiroshima s'étend sur le monde. Les voici comme n'importe qui, sots, arrogants, vaniteux, tricheurs, concurrentiels et monotones, comme de vulgaires rois de gloire, la grande ombre d'Alexandre recouvre de nouveau la science.³⁾

忘れもしない科学的真理が炸裂した日

それは1945年8月6日と8月9日だった。ヒロシマとナガサキに落とされたもの、あれは何であったのか。アメリカはヒロシマとナガサキに、ほかでもない科学的真理を落とした。⁴⁾ そしてそこは一瞬にして阿鼻叫喚の渦と化し、死の街となった。

「ロトがゾアルに着いたとき、日は地の上にのぼった。主は硫黄と火とを主の所、すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、これらの町と、すべての低地と、その町のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。⁵⁾

そういうものだ。

周知のとおり、この二つの町に住んでいたのは悪い人間ばかりである。彼らが消えたおかげで世界はいくらかマシになった。

ロトの妻は、もちろん、町のほうをふりかえるなど命ぜられていた。だが彼女はふりかえってしまった。わたしはそのような彼女を愛する。それこそ人間的な行為だと思うからだ。彼女はそのため塩の柱にかえられた。そういうものだ。⁶⁾

21歳の時「エルベ河のフロレンス」といわれる「ドレスデンの都市全体が土台まで焼け落ちる」のを捕虜として見、体験したアメリカの作家カート・ヴォネガット・ジュニアは、彼一流

の処方で戦争を告発する。ヒロシマとナガサキが現代のソドムとゴモラだというのか。それならソドムとゴモラを裁き滅ぼした神とはいったい誰なのか。アウシュヴィッツ、南京、アルジェリア、ベトナムに神はいたのか。神はわれわれのもとに今いないようだ。ヒロシマとナガサキを滅ぼし、焼きはらったのが神でないとすれば誰なのか。ほかでもない科学的真理だ。ヒロシマとナガサキは、旧約聖書の世界で展開される神の裁きによって滅ぼされるソドムとゴモラではない。およそ僕たち人間の住む街のどこにも悪人など一人もいない、といおうか、それとも僕たち人間の住むどの街も悪人であふれんばかりだ、といおうか。もし、神が滅ぼすのであれば、すべての街、まずホワイト・ハウスとクレムリンから始めて、すべての街を滅ぼすべきであろう。あるいは神が人間を救いだすのなら、すべての人間を救いだすべきであろう。だが、神の正義が真に正義として行われたためしがこれまでの歴史にあるのか。民衆はいつも「官製の正義」という大義名分のために死を強いられてきたのではないのか。民衆はいつも「神」の名のもとに、あるいは「国家」の名のもとに、死を強いられてきたのではないのか。「神」が、一度だって歴史のなかで正義をおこなったことがあるのか。「国家」が、一度だって歴史のなかで正義をおこなったことがあるのか。

近代の神は科学的真理となって悪人を滅ぼし、焼きはらうとでもいうのか。近代における悪人とは誰のことなのか。神には不可能ということはなかるうが、この人間という性悪にはある。いや、そもそも人間にとって、神はもはやとうの昔に死んでしまったかのようだ。すべてはヒトの手に委ねられてしまったのだ。

「おれは何でも知っている。そして眼を閉じ耳をふさいで進む——だが、もはや神々はいない。神々はいない。人間が王なのだ。人間が神なのだ」⁷⁾と。

この傲慢な神となり王となった近代の人間の手にはすべては握られてしまったのだ。これこそ、「神ご自身をも恥じ入らせるような」⁸⁾ 真実なのかもしれない。だからこそ、この「神ご自身をも恥じ入らせるような有様」だからこそ、ロトの妻とともに、塩の柱にかえられることをおそれながらも、歴史に降り立つ必要があると思うのである。自らが営んできた歴史をとくと見すえる必要があると思うのである。ロトの二人の娘は父と共に寝ることで、歴史を始めたのではないか。歴史はいつも、とてつもない不条理から始まるのではないのか。不条理、それは善悪の彼岸にあるわれわれがかかえる事実である。

どれほどの人間を殺せば世の中がマシになるというのか。

もう一度、カート・ヴォネガット・ジュニアから引用しておこう。

「21歳になったとき現実に起こったのは、アメリカがヒロシマに科学的真理を落としたということです。われわれはそこにいた人々みんなを殺しました。そしてわたしは、ドレスデンでの戦時捕虜の生活を終えて帰国したばかりでした。ドレスデンでは都市全体が土台まで焼け落ちるのを見ました。そして世界は、ドイツの死の収容所がどんなにものすごいものであったかを、ようやく知りはじめていました。そこでわたしは、わたし自身と腹打

ち割った話をしました。『なあ、ヴォネガット伍長』と、わたしはわたし自身に言いました。『おまえが楽道家になったのはまちがっていたんじゃないか。もしかすると悲観論こそ肝要なのかもしれないぞ。』それ以来ずっと、わたしは徹底的に悲観論者です。二、三の例外はありました。もちろんいまの家に結婚を承諾させようと説得するなかで、未来は太陽のように輝いていると約束せざるを得ませんでした。それから、家内に赤ん坊を産んでほしいと思うたびに、また未来について嘘をつきました。それからまた、わたしが悲観論的すぎるからもう別れたいと家内が脅すたびに、やっぱり嘘をつかなくてはなりませんでした。』⁹⁾

未来のユートピアとはこうして、あぶなっかしい、それでいて、生きるもののせつない、足なえの駄馬が夢みる願望像によって、少しずつ構築される。「官製の正義」や「神の正義」や科学的真理を振りかざす者たちの手によって構築されるのではない。

真理にくみする感覚は安全性にくみする感覚である¹⁰⁾

科学的真理追求という原理が、ルネサンス以来、表街道を邁進してきた。ルネサンスの巨人たちは、中世のキリスト教神学という公的価値体系との苦闘を、ある時は英雄的に、ある時は狡猾に、生命を賭して崩していった。それは人間による神からの自己解放であり、人間的個の哲学的人権宣言でさえあった。事実を事実としてあばき出していく、あくなき真理の追求であった。まさに、真理追求の「知は力」であった。ベーコンの知はまさに力となった。idola tribus (種族の偶像) を排し、idola specus (洞窟の偶像)、idola fori (市場の偶像)、idola theatri (劇場の偶像)¹¹⁾ を排し、事実を事実としてあらわにすること (真理) を妨げる誤った見解は偏見であり、偶像であり、幻影として、蜘蛛の巣として、取り払われることが求められた。だが、力となった知は自らをコントロールする力を、自らのうちにもたない。

科学の論理は、自らを対象化することによって自らの力を方向づけ、検証するに足るだけの論理を自らのうちにもたない。あえていえば、科学の論理、科学的真理追求の方向を検証するのは、科学の論理ではない、全く別の論理が必要なのだ。

「おお愚劣！〈真理〉とか、真理の探究とかいえば、何やらもっともらしいものがある。ところでその際、人間があまりに人間的にそれをやらかすと——〈ただ善をなすためにのみ真理を求める〉などという次第にあいになってしまう。』¹²⁾

真理が善をなしうるのは、つねに権力と対立し、抵抗する限りにおいてだ。ただその限りにおいてのみ、善をなしうるのだ。ルネサンスの巨人たちがその名に値しうるのは、まさにその限りにおいてでしかない。(ある意味では宗教も同じ歴史を辿る。) だが、悲しいかな、真理は

つねに力となる。力となった真理はまちががなく権力と結びつく。宗教的権力が政治的権力と結びつくように。かくして、真理を生むために苦しみぬいた民衆そのものを圧殺する論理と化していく。陣痛を味わったのは民衆たちの腹だ。悲しいことだが、これが真理の運命なのかもしれない。要するに、真理はつねに力となって、力をもつ者によって吸い上げられ、権力強化に役立てられていく。「自分はただ真理を発掘するだけで、その真理は決して人間を傷つけるはずはない。そして自分がどんなものを掘り起こそうと、その応用にはまるで興味が無い。」という具合に無邪気に真理と格闘するなどということは、いまや許されない。時代錯誤だ。いや、もっとも犯罪的とさえいえる。真理との格闘の成果が将来どのような意味を担うことになるかなどを、あれこれと考えないことが、真理の探究者自身にとって好都合であった。だがそれ以上に、権力者（具体的には政治家や実業家）にとって好都合であった。だからこんにちでは、「真理にくみする感覚は安全性にくみする感覚」となっていくのだ。つまり、真理は権力構造を強化するために役立てられ、真理の追求者はそこで、温かく、安全に、自慰できるというわけだ。これも真理追求という行為が内包する歪んだ論理である。競争原理に支えられた「発展」とか「成長」とかいう願望像の背後には危険で無邪気な近代合理主義の進歩信仰があって、そこはまさに地獄だと思うのである。

すでにニーチェは徹頭徹尾、「真理」という概念に対し懐疑的であった。「いったい何が、〈真〉と〈偽〉の本質的対立があるという仮定を立てさせるのか。」¹³⁾「真理が仮象よりも価値があるなどということは、道徳的な先入見にはかならない。それどころか、それは、およそこの世に存在するもっとも拙劣な証明にもとづく仮説なのだ。」¹⁴⁾ 真理はつねに善などなさないのだから。だから「騙された、とばかりに毛を逆立てて怒り狂うような哲学者らに対しては、少なくとも、そいつらの横腹に二、三発くらわしてやるくらいの覚悟」が必要なのだ。真実だけが唯一価値をもつのだ、などとほざいている科学者たちに対して、そいつらの頭に二、三発おみまいしてやるくらいの、非真理にくみする覚悟がいまや必要なのだ。

真理が仮象や偽よりも価値があるとする道徳的先入見によって、善をなすために真理を求めてきた、その結果がどうなったか、もう十分おわかり願えるだろう。われわれにかかわりのあるこの世界がどうなってしまったか、すでに述べた。ドイツと日本のファシズムをたたきのめすために、いや、ドイツと日本にたたきのめされないために、デモクラシーというイデオロギーを守るために、逡巡しつつもアインシュタインは、原爆の製造を、時の米国大統領に進言した。ドイツが先に原爆を作るかもしれない、作りつつあるという情報が、ドイツの手を逃れてきたアインシュタインに決意させたのかもしれない。いずれにせよ、莫大なお金と人力を投入して、原爆を短期間のうちに完成させ、実験にまでこぎつけた。だがその実験の結果は、科学者たちが想像していた以上に破壊的であることを知った。「これは大変、こんなものを戦争に使うのは困る」と原爆製造に励んだ科学者たちは、使用停止を進言した。が後の祭り。「善」をなすための「真理」は、「道徳的」という「平和のため」という、本当のところは薄汚れの飾りをつけて、科学者の手からもぎとられていく。

国家のイデオロギーは市民の精神を売春させることによって成立する。だが、市民はイデオロギーで飯が食えるわけではない。イデオロギーなんて屁のたしにもならない。精神を売春させられ、そのうえ肉体までも国家のために、薄汚れの道徳的善のために、無料で提供すべく強い国家とはいったい何なのだ。「国家」、いかなる形容詞のついた国家であれ、「国家」はつねに「聖なる」「悠久なる」とかという美辞麗句でいやがうえにも飾られ、権力強化が合目的になされる。そこでは無邪気な真理遊びは、もっとも危険な遊びになる。遊びは徹頭徹尾、遊びでなければならない。遊びは真理から生まれるのではなく、非真理から生まれ、非真理のなかに帰っていくはずである。遊びとは、権力に身を売りわたし、合理的にバランスをとる真理にくみする感覚ではなく、「文化の相対性」という、どことなくたよりない、非真理のなかにありながら、それでいてそれなりにバランスをとる感覚から生まれる。たとえば、諧謔のように。そこには、つまり、遊びには遊びのはりつめた緊張の場があるものなのだ。

人間生活の全体は非真理の底に沈んでいるというのに¹⁵⁾

真理の追求者たるを誇っている科学者たちは、自分たちの真理の成果を奪い取ったのは政治家であり、実業家であるのだから、悪いのは彼らであって自分たちではないと、自分たちを被害者の側に置こうとする。だが政治には政治の、経済には経済の論理がある。科学にも科学の論理がある。これは直線なるがゆえにもっとも脆弱な論理である。それは、ただひたすら前へ進みつづけるという直線的な単純な論理、仮象よりは真理、知らないよりは知ることを善とみなす論理である。直線こそもっとも美しく、かつ、もっとも論理的、数学的に近いとみなす論理である。これは、プラトンのイデア論をひくまでもなく、形而上学以外ではない。自然のなかには直線などない。科学的真理は、そのような意味からすれば、まさに禁欲主義的な理想主義の所産といえる。

純粋な直線など存在しない。純粋な三角形など存在しない。だが、イデアによってそれは証明され、イデアのなかに存在する。だから、そういった観念が現実のなかに取り込まれると、あたかも現実にそういうものが存在するかのように勘違いしてしまうものだ。自然のなかには直線などない。あるとしても、それは、くねくねと歪み、曲がった線や面を飾る補助線のようにしか、その存在理由はない。

そもそも人間の生活の全体は、そういった純粋さのなかで営まれているものではない。いわんや、直線を辿ることを美しいなどと認めているわけでもない。死へとまっしぐらに突進するなど、人間のもっとも嫌がることではないのか。いつだって嫌なことから逃げたい。曲がりたい。曲がりくねった所に身を隠したい。これが人間というものの辿る道ではないのか。歴史を生きる人間は処女ではないし、童貞でもない。

プラトンのイデア論を一つの形而上学として理解せよというのなら理解もできようが、イデアだけでは早死にする。純粋無垢なイデアだけではたちゆかぬ。現実はずっと不純で、多彩で、悲惨で、いいかげんで、不まじめで、それでいて、それなりにバランスをたもっている。おの

おのの集団は不まじめでいいかげんであっても、その内部でバランスをとりあっている世界なのだ。禁欲主義的理想主義など人間の欲するところではない。このような理想主義によって、世界をひとつにまとめてしまう必要などさらさらない。国家をひとつのアイデアで統一する必要もない。学校をひとつのアイデアで管理する必要もない。家庭を父親の強権でまとめる必要もあるまい。それぞれがそれぞれに生まれ生き、それぞれに自分の生にかたちを与え、生きようとしている。それでよいではないか。実存の美しさをそこないたくないものだ。自分の手で自分の生を手造りすること。

いつの頃か忘れたが、夢のなかでアメリカの作家、カート・ヴォネガット氏は親しげにユーモアとしてではなく、まじめに語っていた。「だからさ、もし君が文明の味方になりたいのなら、どうか真理に敵対し、罪のないたわごとを熱愛していただきたい。」¹⁶⁾ 僕は臆臆としながら答えた。「そう、そうかもしれませんネ。真理とは、古代ギリシャ語、アレーティアという語源からして、事実を事実としてあらわにすることである以上、かならずしも真理が人間に幸福を約束してはくれませんものネ。むしろ、あらわにされることの悲劇のほうが多いかもしれませんからネ。」¹⁷⁾ 科学的真理とは希望の原理たるよりは、傲慢の原理に近づきやすいものなのだ。

人間生活の全体は深く非真理の底に沈められている。だから、真理はそういった生に敵対する以外にないのだ。すべての真理は血ぬられた真理だ。これは言いすぎだろうか。

哲学者はもっとも悪い性格をもつ権利がある¹⁸⁾

だから哲学者とは新しい真理追求の学徒だなどと、すまして生きているわけにはいかないのだ。もちろん、世の中の連中が許してはくれない。科学的真理の追求者たる科学者なら、にこっと笑って見ていてもくれようが、哲学者の真理追求などを、にこっと笑って見ていてくれない。軽蔑の横眼をくらののがおちだ。悪くしたら、食えなくされる危険さもある。だから「哲学者はこれまで地上でいつも一番こっぴどく馬鹿あつかいされてきた生き者として、なんといっても〈悪い性格〉をもつ権利がある。……哲学者は今日では何に対しても疑念をいさぐ義務がある。猜疑という猜疑のあらゆる深淵からして極端に底意地わるい流し目を利かす義務がある。」¹⁹⁾ 謹厳実直な道徳的善なる真理追求とやらを日夜営んでいる徒輩の尻に、非真理の泥沼から、一、二発、いや、苛責なく彼らをうちのめすほどの底意地の悪さをもたねばならないのかもしれない。さもないと、またぞろ、道徳的偏見としての真理追求に身を委ねる者どものいいなりになってしまうからだ。それも税金をたっぷり使ってなされる真理追求とやらに誤魔化されてしまいかねないからだ。

科学的真理は希望の原理であるよりも、傲慢の原理に近づきやすいのかもしれない、と書いた。つまり真理は時に、人間を世界の、宇宙の中心に据えたこともかつてはあった。だがそれも人間の思い上がりでしかなく、結局のところ「真理」の名のもとに、人間を生ゴミのように処理してしまっているのではないか。「道徳的」にして「善なる真理よりも、仮象のほうが」、非真理のほうが、人間を、そして人間とともに生きる動物や植物を、そしてそれらが生きるこの

惑星を大切にしてくれるように思うのである。真理よりも仮象のほうが、非真理のほうが、人間を、世界を、「現にあるよりも、すばらしく見せて」くれると思うからだ。それならそれでいいではないか。人間の浅知恵で地球を砂漠にしないでほしいものだ。冷えたクレーターにしないでほしいものだ。それだけでなくも年ごとに20,000ヘクタールが砂漠化しているというのが、この地球の実状なのだから。

真理よりもこの肉体の健康を

「あらゆる哲学的思索において、これまで問題であったものは、〈真理〉などではさらさらなく、何か別のものだ。言うならば、健康、未来、成長、権力、生……が問題だったのだ。」²⁰⁾

それなのに、いかにももっともらしく真理の側に、正しさの側にひきよせてしまったのも哲学者たちだった。ソクラテス以前にはそういったもっともらしいものはなかった。「これは真理なのよ。」と言われると、僕たちは、「はい、さようでございますか。」とばかりに、握りこぶしほどもある慈姑くわいの煮つけをまるのみにするときのように、眼を白黒させながら、いやでも飲みこまざるをえないようにされてしまう。これは健康によくない。「真理」と呼びならわされている事柄を、再度、検討してみる必要がある。疑ってみる必要がある。そもそも「真理とは、自分のいわく、因縁のかずかずを知られまいとしている訳あり女」²¹⁾なのかもしれないのだ。「訳あり男」でもよいのだが、ドイツ語もフランス語もラテン語も「真理」をあらわす名詞が女性名詞なのである。女性蔑視だなどという誤解を招かぬために、ニーチェにかわり、言いわけをしておく。もっとも、ニーチェは少々、女性蔑視の思いを持っていたようでもある。

「真理とは、自分のいわく、因縁のかずかずを知られまいとしている訳あり女」なのだ、ということを確認しておく必要がある。真理の発見とか発明の数々は、いつも善をもたらしたとはいえない。善よりも悪をもたらしたことのほうが多いのではないのか。支配的権力者にとって善であっても、支配される側の人間たちにとっては、それはまったくの悪でしかなかった例はいくらでもあるのではないか。地球が円いということがあばき出されて、それなら西まわりでインドへ行こうと船出したコロンブス。発見とは最初に見つける行為のことだと定義されている。だとすれば、コロンブスはかの大陸を発見したことにならない。かの大陸には、すでにヒトが住み、営々と生活していたのだから。かの大陸に住み生活していたのはヒトではないのかのようにみなすことによって、はじめて彼の行為は発見とみなされる。これは、ひどい矛盾である。コロンブスがあの大陸を発見したとき、「彼は、自分の発見が、ヨーロッパではとくに克服されていた奴隷制度を再びよみがえらせ、黒人売買の基盤を作りだしたということに気づいていなかった」。発見とか発明とはそういうものだ、と今われわれは言ってしまうてよいのだろうか。

鉄砲の発明が弓矢に代わり、狩猟をより有利にしたという観点からすれば、まさしく鉄砲の発明もまた他の数々の発明と同様、人間の自然からのめざましい離陸といえよう。しかし、この鉄砲がつねに同時に人間に対して向けられつづけてきたということを忘れてはなるまい。機

関銃が狩猟に必要なのか。原子爆弾が狩猟に必要なのか。

いつも多くの発明や発見は、自然支配、人間の自然からの離陸という、人間の力強さ、美しさ、有能さの表現であった。しかし、それが同時に、社会的経済的構造の変化を必然的にひきおこした、ということ忘れてはなるまい。鉄砲の発明とか、「コロンブスのアメリカ大発見」と呼びならわされている事柄が、かの地に住んでいた人々にとって何をもたらしたかは、周知のとおりである。当時の地球上の支配関係がことごとく変えられてしまったということ、それがこんにちにまでいたる支配関係の基盤になっているということは、周知のとおりである。ヨーロッパの道徳的理性概念に支えられた合理主義の前で、あの大陸に住んでいた人々は駆逐され、いまでは自分たち固有の宗教を信ずることをさえ、アメリカ合衆国大統領にお願いしなければならないというのは、いったいどういうことなのか。さらに、ヒトとしてではなく馬や牛として使役されるために、当時かの大陸へ連れていかれたアフリカのヒトたちは、なんとアフリカ大陸全人口の三分の一だという。あるいはまた、インカ文明と呼ばれ、マヤ文明と呼ばれた文明も、ヨーロッパ合理主義によって、ひとたまりもなくねじふせられてしまった。

かの大陸に住み、営々と生活していたヒトたちは、ヨーロッパ文明、ヨーロッパの真理によって健康になったのだろうか。以来、彼らは貧しさのなかへ突き落とされただけではないのか。アフリカ大陸の人々も同様、真理によって暗闇のなかへ突き落とされただけではないのか。彼らは彼らの生活を、彼らのテンポで、彼らの平衡感覚でもって、営んでいたはずではなかったのか。近代ヨーロッパの合理主義は、植物や動物や山や川、つまりは自然との間にもっていた人間の平衡感覚を狂わせてしまった。

真理が健康にどれほど役立ったのだろうか。「長生きできるようになったですって?」「じゃ、おたずねしますけど、本当の健康をどのようにして定義なさるのですか。」「長く生きること」と「よく生きること」とは単純な算数で計算されはしない。科学的真理が自然の生態系を崩し、緑なすアマゾンの原初の森を砂漠化しているという。ちなみにアマゾンの森林は、酸素を必要とする地上の生き物のために、その三分の一を供給していた。地球というこのかけがえのないわれわれの惑星を、科学的真理が、科学的真理を駆使する権力者が勝手に処理しているかに思われてならない。そして、そういった行為の根底にあるのは経済成長という原理であり、それはエントロピーの増大を避けえない原理である。エントロピー増大を加速させる論理である。

われわれは、科学的真理よりも生を望んでいるのである。生きることが好ましく思えるような、そういう世界がほしいのである。核の脅威のない、東西の対立のない、飢えのない、そして富が均等に分配されしかも自由であるような世界、それは「いまだない世界」としてユートピアなのだが、そのようなユートピアがほしいのである。ルネサンス以来、いや、人類が文明などというものを始めて以来、われわれはそういったユートピアへ少しずつ近づいているのではなく、どんどん離れ、遠くに来ているのではないのだろうか。生きることが好ましく思えるようなそういう自分の世界をユートピアというのだろうか、われわれはそういったユートピアから日一日と離れ、奈落へと近づいているのではないのだろうか。

月にヒトが立つことがユートピアの実現ではあるまい。「月には持ち帰って経済的に引き合うような資源もなく、大気もないことくらい、最初からわかっていたのに」、巨額の金をかけてアポロ計画を実行した。ユートピアとは、このかけがえのない地上で体験されるはずの世界のことではないのか。

真理は人間を破滅に迫りやる

人間が完全な認識をもつとすれば、まさにその「完全なる認識のゆえに、人間は破滅する。これは人間存在の根本性格である。一だから、ある精神の強さは、その精神がどれだけ〈真理〉に耐えられるかということによって、はかられる。もっとはっきり言えば、どの程度まで真理を希薄にし、隠蔽し、甘くし、鈍くし、偽造する必要があるかによってはかられる」²²⁾ とニーチェは主張する。

そしてこんにちの真理は、コンピューターによる数字によって、真理の真理性を確保しているかにみえる。チャールズ・チャップリンが30年代に先取りする形で批判していた機械と人間との主客転倒の世界とは、まさにこんにちの世界である。数量的に実証されないものはもはや真理と呼ばれないまでに、真理はいま、How toの論理を軸にしたコンピューターによってその後光を磨きあげている。コンピューターによる真理への信仰は、いまやコンピューター・ファシズムと名づけてよいまでにその威力を発揮し、それを掌握する者たちが形づくる政治形態は、テクノクラシー技術家官僚政治となって、人間精神の売春制度を合理化する。こんにちにおける政治とは、ほかでもない、人間精神を売春に供することによってのみ成立しうる、類いまれな政治である。

コンピューターによる数量化された実証的真理を真理とみなす彼らは、そこにこそ未来における自由な精神が生まれると幻想している。これは恐ろしい幻想だ。それはファンタジーではない。錯乱であり、倒錯である。自由な精神が生まれうるとするならば、それは真理への信仰を捨てる時でしかない。真理のもつ価値を徹底的に批判し、問題視する必要がある。真理への意志は批判される必要がある。

「人間が十分に強く、十分に堅く、十分に芸術家になりきらないうちに、あまりにも早々と、真理を手に入れてしまう」²³⁾ ことは危険なことだ。実証主義的真理の前でおびえ、萎縮している子供たちに、なにゆえ、それほどまでに真理をおしつけるのか。子供たちは時間をかけて少しずつ自分の手で、自分の手におえるだけの真理を摘みとるであろうに。子供たちが生きるのに必要な真理はどれほどあるというのか。子供たちは自分で、自分の力で、ゆっくり大人になっていこうに。なぜ、そんなにも急がせるのか。「子供たちは問いのなかで生き」、その問いかけのなかから少しずつ、自分の生にとって必要な真理^{ロゴス}だけを摘みとっていくのではないのか。「大人たちは答えのなかで生きている」がゆえに、その答えを、しかも拙劣な答えを、陳腐で、紋切り型の、屈辱的で画一的な答えを真理として子供たちにおしつける。

人間は真理などを愛してはいないのだ。

人間が愛しているのは、ひとかけらの、しかもかけがえのない自分自身の生なのだ。

認識は樽のなかで日なたぼっこをするはずなのに

認識が真理となり価値を生みだし、最終的には権力に尾っぽを振る限り、つねに認識には金や名誉や社会的地位のような物神がつきまとい、「ヒロシマの長い影が世界に広がっていく」。

「認識にはもともと偉大さも、権力もなく、崇めたてまつることも、征服することも、価値もないのである。発明や直感や発見は軽快なもので、力もいらず、金もなく、香をくゆらせることもなくおこなわれる。おそらく根拠もいらない。アレクサンドロスがいなければ学問は日光浴と同じである。」²⁴⁾

樽のなかのディオゲネスは、アレクサンドロス大王に、「そこを退いてくれ。」と言う。そうすれば、認識という太陽の光を浴びることができるのだから。太陽はまんべんなく万人の上にあふりそそぐ。だが、認識→真理→価値→権力というこの一次元的な論理図式の破棄作業をこんにちのわれわれはディオゲネスやフランチェスコとともにできるのだろうか。そうすれば雨の日も喜べる。「雨の日をよろこばなくなつて、雨の日はあるのだから。」核の雲がひろがらないかぎり、日はまた昇り、認識の日は輝くはずだ。雨の日は、認識のための準備の時ではなく、雨の日の認識も認識を深めるのだ。

1930年生まれのフランスの哲学者、まさに百科全書的な知的遍歴をしたといわれるミッシェル・セールは自らの百科全書的認識そのものを痛いまでに問いつめ、結論する。「認識とは、ごく単純にしかもあらかじめ王の身体をよそに移動させることである。」²⁵⁾「王の身体」とは価値であり、物神であり、権力である。そういう影をあらかじめ取り除いておかないといつのまにか「知のアレクサンドロスが次々に形成されるし、知が賞金や物神や商品であふれかえる。力の名誉を賭け、あるいは地位とか金の栄光を賭けて競争する」ようになり、果ては、自らの学問的認識の序列をより高めるために、「認識の栄光のために競争しだす」。そうすることで、学問的認識という長閑に樽のなかで憩っていたものに影がさしはじめる。ソクラテス以前の「知の草創の頃には、賞金も物神も、商品もまったくなかったが、今では知の対象はそうしたもので満ちており、知は日常の世界、アレクサンドロスの世界にすぎなくなった。知はそのために働くものをより良くすることはないし、主体の向上がもはや新しい対象を発見させることもない。学者が見ているのは自分の力が、したがってその影が大きくなることである。学者の目にあるのは自分の背丈や栄光が、したがってその影が大きくなることなのだ。学者が見ているのは自分の予算や勢力や権力が増大することである。ヒロシマの長い影が世界に広がっていく。」²⁶⁾ 地球を30回以上も破壊できるまでになった認識の成果が影となっているこんにち、まだ新しい認識から始まる生活の場、世界を再構築しうる認識の可能性はあるのか。われわれを殺さないものは、われわれをいっそう強力にする、というニーチェの苦汁に満ちた、それでいて希望の原理を残している命題に従うならば、まだその可能性はあろう。

あらゆるものを統合し、管理し、支配しようとする政治の影のなかにながら、統合をゆ

るめ、管理から人眼をしのび脱出し、支配を少しでもはねのけようという可能性、そしてそこに生まれるであろう多様な生活の場を看守りつつ、自らを守ること、それをセールは別の書物『生成』のなかで、「哲学者は多様性の番人であり、彼はしたがって時間の牧人であり、可能性を保護するよう努力する。」そして「哲学者は初めて哲学と国家の分離を経験する。哲学者は科学が、支配する側ではなく哲学の側にくるように、つまり認識の側に、ということは創意の側にくるように呼びかける。」²⁷⁾

認識が創意として花開くとき、認識は自らを飲み込もうとする権力を排するはずである。権力を排しつつなされる日常の行為の原点として認識が王の影から身を離しうるなら、認識そのもののなかにひとつのユートピアが発見されるであろう。ユートピアのない認識は、つねに、真理→価値→権力というこれまでの図式の影に身を横たえ蒼ざめるしかないであろう。「ユートピアがなければ認識はもはや取るに足らぬもの、寄せ集め、複製にすぎなくなってしまうであろう。」²⁸⁾ ユートピアに触れえないような認識、それはヒロシマの影、アウシュヴィッツの影、ベトナムの影、南京の影を再び惹起しうる認識である。

ユートピアが彼岸として、此岸からただ憧れの対象として思い描かれている限り、つねにユートピアは彼岸である。だがわれわれが日常にあって経験するように、彼岸と此岸との壁を取り除いたとき、つまり、プラトンの二世界説を多様性と猥雑さと混沌と彷徨のなかに解き放ったとき、彼岸は此岸にとっての、単なる未知の世界ではなく、踏み入ることのできる世界、だが今さしあたって未知の、踏み入っていない世界にすぎないものとなる。ユートピアとは、「内なる王の身体を移動させること」によってなされる認識のなから紡ぎだされるはずである。しかし太陽と化した王、権力は移動してくれない。その限り、いかに「内なる王の身体を移動させ」ても、認識は影を作り、影のなかで暗躍するしかないのだろうか。

「私の求めるのは不在の場所だ。太陽・王に捕らわれた私の身体の中にある忘却の場所、序列で線引きされた私の心の中にある針の穴、そこでなら私はアレクサンドロスの身体を移動させることができるかもしれない。」²⁹⁾

そうすることで仔羊たちは狼たる王に勝利しうるのかもしれない。民衆たる「仔羊は永遠に狼であり、」王たる「狼は身代の牡山羊である。」「両者は同一の唐草模様に描かれた伝統の奥底からわれわれのところへやってくる。」³⁰⁾ これはこれまでのわれわれの歴史を語る寓話ではないのだろうか。

彼岸と此岸の区別がなくなったとき

われわれの日常の営みはすべて、ユートピアへの可能性として行為されるはずである。そこではもはや、未来は閉ざされていない。模造の太陽神、太陽王という一神教はいやおうなしに、支配の序列を強化していく。だが仔羊たちの認識は天なる神、唯一神にではなく、^{やおよろず}八百万の神

を身のまわりに置き、それらの神々によって自らの内なる王を移動させることができるようになる。八百万の神々、多神教、アニミズムのもとで仔羊たちたる民衆は一神教的権力・太陽・王と対峙しうる。八百万の神々は彼岸にあって香をくゆらせてはいない。多くの神々がひしめきあっている神の国、そこは天国ではない。天国とは民衆には無縁の国である。

彼岸はつねに此岸のなかにある。自らが一步、歩を進めることで、彼岸は此岸となる。彼岸と此岸との間には、ひとの越えることのできない壁があるのではない。自らのうちに無力の諦念を病むとき此岸が彼岸になっていく。自らのうちに強者の論理をくりひろげ、それによって支配しようとするとき此岸と彼岸との間に越えられない壁が作られる。

彼岸と此岸との区別がなくなったとき、われわれは自由になる。「自由な力は空間を駆けめぐり、弱さを悲しむ。しかし自分の強さを確認するために弱さを求めはしない。この力は競争に抵抗する。力は攻撃とは区別される。強さとは比較に対し抵抗することである、偉大さとは高さの序列づけに抵抗することである。順位の関係が荒らしまわることのない新しい空間の中に生きる人に幸いあれ。」³¹⁾ 順位の関係が荒らしまわることのない新しい時間、空間、それをユートピアという。

これは認識→真理→価値→権力という図式から解き放たれた此岸のユートピアである。そこにはお金でできたユートピアはない。安全性にくみする真理もない。いつかかならず炸裂し、人間を殺す真理もない。権力の影から解き放たれた真理がある。

此岸のユートピアでの生活態度を支えるものは実体のカテゴリーではなく、関係のカテゴリー、生成のカテゴリーである。一なる神による予定調和ではなく、八百万の神々との共生である。

「いわゆる科学的認識」がユートピアの青写真を作り、彼岸を此岸へともたらずことはない。むしろ逆に、此岸を彼岸へと売り渡し、「その横柄さと、バダンティックで抹香くさい飾りをつけたガウン」をひらひらさせながら、こんにちの表街道を我がもの顔に歩いている。しかも「喧嘩早い攻撃性と、自分はいつも正しいという執念ぶかい自負」（筆者にいわせれば自負とは自らの弱さを隠蔽するために自らが自らの内部に捏造した自己への偏見の総体を誇ることでしかない）だけをたよりに嘘をつき、それでいて心おだやかではない。そういう科学的認識がこの猥雑な共同の時間のための認識へもっと近づいてほしいものだ。その時、この共同の場に、ユートピアを描く可能性が生まれるだろう。「科学的認識が教皇の世上権を獲得して、聖職者的支配をおこなっている現在」、それは望めまい。「科学の専制的な理性と庶民的な知恵との間の婚約の式をあげることを、まだ科学は望ん」でいるのか。高慢な科学との結婚を、庶民的知恵は主の輿に乗ることだと考えてなどいない。だがこの猥雑な共同の場に巣喰う「理性」「いかさま理性」「蒼ざめた理性」「食意地だけは人後に落ちない合理主義的理性」「How to の理性」は、これを望んでいる。だがそれは結婚ではない。科学への身売りだ。民衆の知恵がまたまた売春に供されているのである。

合理性、単一性、タイル敷つめの世界を旨とする How to の論理を支える「理性とは水に映っ

た影にはえて餌を落とした犬同然ではないだろうか」。すべてを合理的に解決しようとする合理主義こそ、もっとも非合理的なことではないか。様々な民衆たちの思いの丈を聞きわけるとはできないまでも、そこに彼らの思いが渦まいていることを、「理性」は知る必要がある。理性は科学的認識の番犬ではなかったはずである。海はかたときも静まりかえることはない。常に動き、ざわめいている。そのざわめきに耳を傾けていくのが人間的理性ではなかったのか。「科学的に純粋な認識のため」と称しすべてのノイズを民衆の怒りと苦悩を捨象してしまう「理性」とは理性ではない。ノイズを捨象してしまった「理性」とは理性ではなく、単なるデータにすぎない。そのような単一化された数をして「理性」と呼ぶならば、もはやこの世界、歴史はその猥雑で、犯罪的で、しかも、かたときも静まりかえることのなかった、生きた姿を隠し、冷えていくだろう。そして静まりかえり、数でできたバベルの塔が完成するだろう。

表題は Michel Foucault: Du pouvoir, in L'Express 13 juillet 1984 からの引用である。

文 献

- 1) Michel Serres: Détachement. Flammarion, 1983, p. 135
- 2) Jean Hyppolite: Le «Scientifique» et l'«Idéologique» dans une perspective Marxiste: in Diogenes. Nr. 64, 1968
- 3) Michel Serres: Détachement. *ibid.*, p. 139
- 4) Kurt Vonnegut: Wampeters, Foma & Granfallons, 1965. 訳『ヴォネガット、大いに語る』211頁
- 5) Die Bibel: 1. Mose. 19, 23-25
- 6) Kurt Vonnegut: Slaughterhouse 5, p. 33
- 7) Arthur Rimbaud: Gallimard Bibliothèque de la pléiade, p. 47
- 8) Kurt Vonnegut: *ibid.*, p. 237
- 9) Kurt Vonnegut:
- 10) Friedrich Nietzsche:
- 11) Francis Bacon:
- 12) Friedrich Nietzsche: Jenseits von Gut und Böse. 1966. Carl Hanser Verlag München. Herausgegeben von Karl Schlechta, Nr. 35
- 13) Friedrich Nietzsche: *ibid.*, Nr. 34
- 14) Friedrich Nietzsche: *ibid.*, Nr. 34
- 15) Friedrich Nietzsche:
- 16) Kurt Vonnegut: *ibid.*, p. 214
- 17) 木戸三良: 『哲学は死に果てたか』1982. 以文社, 22頁
- 18) Friedrich Nietzsche:
- 19) Friedrich Nietzsche: *ibid.*, Nr. 34
- 20) Friedrich Nietzsche: Die fröhliche Wissenschaft II. 12-2
- 21) Friedrich Nietzsche:
- 22) Friedrich Nietzsche: *ibid.* Jenseits von Gut und Böse II. S. 602, Nr. 39
- 23) Friedrich Nietzsche: *ibid.*, II. S. 620, Nr. 59
- 24) Michel Serres: Détachement. *ibid.*, p. 139
- 25) Michel Serres: *ibid.*, p. 141
- 26) Michel Serres: *ibid.*, p. 139
- 27) Michel Serres:
- 28) Michel Serres: *ibid.*, p. 137
- 29) Michel Serres: *ibid.*, p. 146
- 30) Michel Serres: *ibid.*, p. 160
- 31) Michel Serres: *ibid.*, p. 166